中村俊定文庫
文庫 18
612

野坡四歌仙　附詩野問答

葉付菊やふうりぬれ行ふねの面　坡

野松の中をたしる夕雑子　路走

小酒屋に立て休む酒もかし　〃

霧うる咲を引おこすうり　坡

稲刈よ裏そり金ふ月のくれ　〃

汐さす砂よ花し　墻　悟　〃

拔ころまるきりつきて奪の後　坡

一日中ぬるき　〃

菊を深る平蔵の藪の中　〃

引なるへてるも大根　走

立なりゝ寛永の頃の姿を結あけ
ありそめ落生初のふこの姿
時代は細工も絶ぬ上邪物
まくる所なし むこ國の親類
釣うるは釋迦をこねよ竜の下
仰らんめるよつてしれおく
そるは月雪そ一枝のよこてり
手人かそかるかからは組合
跡沢口の名はつまりこるむこ京
焼酎と煮る 蹴むこ
醤育し法度のものをまねせて

坡 逮 坡

左へ行つく 廣匠は乃
一つつ おすし 玉こる 小高ひ
那こまて 言き 禪ちは 梅 逮
仲ゐを 軽うよひ 主の月
皇よむうく 黄しき 沖
江戸 役十日なれは うらうて
中戸は 絵を おろを 九時
冬の月 淡茉の 芝切 高し
鶴うけて のむ 京 きくり
むしらへて 月出 のおそき 沖京
釣のるよそむ 切 の 礼

早稲て簀板なる矢筈舟
稗の花あとを志ふ大潮
我宿を咲ちる花よ故郷して
行義よ志む志の年

芦雁
埋坡
穿鹿
素枫
不雄

水月や鉢拵灯籠名志し
植田よ波をもこの所口
独を過ふ工夫よ郭内志ゆ
表窓さなく重ねおく文
紫雲の定りなる名の月

納柳
磨洋
駒走
坡
香
楓
鹿
柳
雄
走
洋

拵えよりる発るあしのと
在走りて杉ふ思ひ恵よ飛宝し
華嚴瓦破り書は一筋
雪夜を却夫よつふ高のもの
俗流の筆をそめし貝楠
扇干も稲屋そて泡流て
かふるぬあしよもりる夜袋
咲ちる法月細さ塔の上
高よむ思て おろ志 椋 与
う由志る人よ吋 家を分て
夏よつふ 杉夏

十徳よりうちとりかへて
大坂の自慢ばなしなるのは
学問をふるふ為せうる福せ叶ふ
ひろけて見たる櫛の妹きぬ
深沈の号を学く京あぶの内
みそらく風よむこうふうこうさ
禁ぜて教ふるのうふる橋の深
拵ひ一き社家のもの乱地
うき意の鎖法の姫を嬉しなて
孫子ばらを拵の世渡り
禁ぜられ消て所走れ月日

雪
坡
鹿
楓
雄
柳
洋
走
坡
雪
楓

さらう会せうる神おの新珠
一例よ女中の結をを意なく
時く屋うし所
教風よ樗も樗もとめさて
格子のうちを見の色りの妻
分散の沙法も蕎麦て出るあり
いくめの車く沙の山状
蛤状菓よ心ひつく色さうり
弊も結よあるよ日

鹿
柳
雄
走
洋
雪
坡
鹿
楓

鹿の羽状休めて三汲の渭

古乃
芳坡
藤英
梨里
宰留

乃
達
英
里
達
乃

留
英
里
達
乃
坡英
里
達
乃
坡

泡沫のうまれ
引ふこと水を吹の打あるき　英
笠よ点出を　水の出よ　星
鈴山も根よりうる秋の月　友
お羽ゝ　鼻を通を　焼　鳴　苗
うきくとも一ろよ胡子を雲ひを　英
ひをつむ　法印　峡　星
池辺の岡後ひとつの紀をあり　友
蛙のこゑを　鳴　大風　坡
鐘会ま一くはちちふちちり　坡
ゝの墓を　ひとつる　瓜畠　英

戸ゝまて蛙の法あふ花咲て　星
ほろ庵ゝ　ちるゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　等

芒の穂ちらちらまれちり　風國
ところ舟ゝ　絵ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　朱拙
鳴蛙も咲ちの　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　丈芝
芒つきよなちか　月新　ゝ
ふまてきる又法華純の雪詰る　拙
仲さのよちく　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　國
名風呂の掬あちゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　芝
鮒の神酒を　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　拙

陰さしの雲晴かゝる月さむき 、
とけぬ霜なる引ちこき帯 玉
咲ぬ日もいつも鐘より松の下 菜
四よ棚菓子ふりける蔵のたそかれ 玉
祇王ちのかゝりおくられ半紫 、
多く世話ゆ種のぬこる名月 菜
りんの中へ行足不案して 、
境ぬけ出せし風のたちまち 玉
錫杖の山よ暮入ぬさこのは 松
めくらとひるや門のこゑ 、
出会る身とぬ病床のあさくさ 、

すめり通る江戸前 、
狩つきのひるのこそかしこ 、
言ふなそも出て呼ぶる 菜
きこしのちみてみるとそ晩り 玉
此一あて男仕あける 菜
唆笑のさせて添しき歩むらい 冏
ふつさ菓子んをいつそ移すする 菜
飛ろしと病てみせる君菜 、
紫の葉よりよ松菜ふ引しける 玉
誰かそ堀て伊吞むもの 松
羽よつらせて秋こゑ時の春 菜

名やをさす池ひきさき戸の元宮　丞
見送るやうしもなすぬ白風　、
白眉それもしなにのなきしく（イキ）　正秀
かけ野もあまき髻（モトヒ）去めきる　丞
ぬこみし梨一枝て世出中　秀
叙ふせさなら京へ飛さう　杜

右一巻は湖南の國子と文通しけるとりしも
風洞丈ハ正秀なと出京しあそはれて
そこさはしされしゝ歌仙にみちられハ
句のゑがまゝまん

許野消

元許論ハ其角子にあらすして諸子にげせるをあわしたるへい
杜少陵を古今独歩の詩聖なれと生涯とはさらにもいはれ
十数年のあき老去りあるそれをやすし中唐にいたりて退之
微之ら輩をしめて其道を推たとひしより宋元を経て明に
入て後をそいよくいよくしまふ大家の日月のあまく何國
もし輝くあり天経となり定まりたるおもふに万代ならん
とくの多くあめ今此一帖を蕉門許六埋没あらけ候へぬる
俳諧の道を論ずる再應の筆ならさまん人にまさるよまき
あしきをあしくとなす道とならは恭的にさまるもまさく
かうるし所るひと余り深究せずして諸家へとみるに筆をとりて

[illegible]

和さへる

天明五年巳九月

浪華人

正月十一日年始の句状 和漢罪旦帳 [illegible]

[illegible]

[illegible]

一八ツ橋集 [illegible]

[illegible]

一八ツ橋を十りうけ [illegible] 田植うた

一四条三川 [illegible]

[illegible]

一学の雅流 [illegible]

[illegible]

前よ一座 [illegible]

[illegible]

生涯の白保 [illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

結び合せるものもて来る餅よ蕎麦といふ横平天地方会糸
別ふ寄めとやーのみて来ぶ先師の句を乗の寄せ合せるる
句十七七八ッて是もて作れ之餅の句も寄せ合せあるハ掛詞の
詞又掛ものもなく五会せて一句よりて絶あを会せるるものは
乗ると乗の二ツ会せるの寄いいとあさ寄ともに先師生涯人
まを人と是を寄る人の一死後桂宮の寄を生れ義妙を民
恐ら生ぶ之武ものよりて待すの我ふを人を先師の詩
やされるるるも武ものよりら義の新詩ヨ道の行方とて新
麦を年竹のみ之ち流五井南を妙法蓮華経と
四句いいーとやを四句絶やされて象ふ五寄を命詩の五
文字を完まてあるとや新麦ヨ竹のみ麦の寄のようとら会

せるのようとやハ陸ーして既ヨ泄ようられとて新麦や
竹のみ時の寄の是と化り我ふヨ寄ーの寄を会せんの
面ふとやふを武ものは寄ら寄の餅作ヨ寄のようひも皆この
ふて殺されら句まて武場ふを答て楷の寄とあされふみも
寄ヨ人の面ひ寄を人を寄てもちやとやるを人の寄ー
やさぬふを殺ーやとて人の面ひなを寄を先師ハ是を行ことて
きくひやされて子那寄由ふ寄ーふれやりも是ヨ寄ら
むの一文衣の紙我ふ徒ふヨ遊留いさふて時ヨの赤いヨ寄ヨ寄く
小神を寄ようかさまても次ーー年ーまてありしヨ是新恨うう
表を寄まて面ようしヨ寄の日行ふるといあを是まてら弱く
仏ふやようへくら人の寄あを人の寄ヨ年寄五年と弱くへる人を餅

またいふ名の心を忘れたる時ハ歌のかなしみもなくて歌の出る
出合かしらに人の声もしやさぬ先に声やさしハ人をあつ
とゆさてハいにしへの歌仙達の正風体とてよまれし歌も此不
易にて候ほん家隆卿もしめ秋の風の涼しさを不易と思ひ
ける歌に風そよくならの小川の夕くれハみそきそなつの御掟
をも俳諧人に取ても夏を忘れさる事とよある事こ此字の是
よそなる汁こさくに又昔の言葉のうらを俳人にさつる句に昔の
言葉のおもて見せたりと言ふ夫猶又合せ（言葉の作意を世上に高遠といふ也）これものにて昔に新しもの
心の通ひを背一つに骨折申されける事也諸人に示す所一句不定
いたしても季と季の出合せん心の通ふ事なく只作にてハ歌にても
自由にかけりしかも然に及ぶ図らかきける季と季の通ひにて候へハ

名所よりは物の名に至るまでこの格にて俳諧の図の難波のあしまゝ
夢かれや芦の枯葉に風わたる難波にあし名物にて何との
言葉にても一手の心やくるもの枯葉に風のわたるハ同じ事にて候
ばうらぶれ芦なきくなれハ人もさらにかまくらをいきておかん
といふ松魚ハ他にてなし生きてさえたる心の言葉物と世上にハかまくらを
此春無以て初松魚にかまくらの名所の通ひ天のあまりにて
かまくらの名所にて候かも此いたし候汁の柳もよき時の
業初雪に歌仙の言葉皆こ此通ひ一様にてはさて候れ流
昔よくた形色のゆゑあやまりさはりてハ無くゆゑ浪に有る
中にかおの季ある通ふ事俳諧にてハ只ぬるものをはさてうきにては
誠の時分に上に申おく也

許六蕉翁より受伝する大なる事の玉虫せ貫一なりと
拙者なる人の門子と義ぬ人も各其もの述きよりて忠
孝仁智の事と言示されし例ふ有り実に義を
言を以て許六と号新語くれんを当一とんしてみや
とよ多くと言根流の学ぶ人きへて撰会ありて学問
なる所と言事ハ頑こ学しものが言を
一流に成て此事を要と言ふ大と綱るまて
高隆の歌を初桜の紙をして六ヶ敷事をなすしるい
ふるまて言を言ふらる称を言ふ歌といて秋とハ言なせ
や紙勅撰の巻と軸よ入られハ多くしく流布よ及ん
況ハ芭蕉翁の撰会天の白とあるまりに

上月六日　地蔵丈

許六

一芭蕉の発句事と言会ふ千まセ八もられ有ふ仏の道ひ貫
一のまを流を初句の人と此物よくなく此物不調を成して八発
句まを初句ふ言れまを句を言句ふを月一まして新まを新
ひまふ言会せまのを言ふ一とはねせをく言会なくて言一
物よ仕まて句を書をれ初句及ぬ所よりて大方を会を指ものや
ふまいまふ芭蕉の言会ふ一学ふハ中を数ふまふ又下の七文上の

五七五等句調ひゝし句をあまたよ学ばんとすれ上手なる者
句をあまたよみ学ぶ者を居句といふ師の長句を一句用ゆ
只今の長句をふまなりる句あまたに義立ありしとも
此乃三十の拙句いとしいへば大形相略中句と選ばれ八代後
百年を過てても義中ならず人丸聖人杜子美李白後の
人及ばれといへども知らるゝ所天下の例者よき句はよく
学ぶべし此所ありそれ長句も一句なれども連乃
の句人ゝは難ふ
余常に思ふ〳〵蕉門の中に聖境を学ぶ者あり
一ツ見えれ又俳諧も俳らの人ゝ外の句人ゝもよろと
こゝろかけ長者元文の所よりそれを対ふの句とハ

蕉翁の句の句とハ俗ハ句を要を要西洋こか或人ゝ句て
生涯ハ下ゝなれども老人なれ義中されようとも
うん実ゝと越るとは此言を言ふ人ゝは十二八九世故
ゝ理ありて風雅の長をよくんばたり中ゝも長全も
ゝ人ゝ生涯の人ゝハ此難なり〳〵ゝ此ハ的中の長ゝ
一学ゝ俳諧のと実ゝ妙と作られ〳〵ゝ句〳〵俳諧
ゝるといふ七文字ゝ中ハ義なるうへ〳〵神妙ゝ至句ゝ
只自然ゝ此と学文作ること学ゝ俳諧ゝ
俳諧ゝ二ゝ中ゝ〳〵ゝ先ゝ句ゝ俳諧ゝ
俳ゝ学ゝ俳諧の長句ゝ句ゝ俳諧ゝ
双方とも師の句なる故学ぶ不形ゝ人ゝ〳〵ゝ学ぶ者ゝ人義

の句と云ハ奇しく妙絶にして至る所稀なり古より詩歌連歌の
達人といへども作る時により言の葉の（態々）とゞこほると滞むことにて出来ざる事
あるハ古人も出来がたき事限りなしと云へるや古れなる者と怖
て可否をも分得ぬ胡椒を丸呑にする類の云ることば先賢の句とて
もよくも見ずして地句と定むる其外の余へなずり鏡ハ是へかゝる然るの
句もさのみ續飯と云にハあらん強て論ずへからされハ古今も古
へも、あすれハ必ずよきをのみ好しうけがら是ぬ歌とも
あるなりとぞ又定家卿の筆にも上手と世にいふ人の歌
といふとも、すぐれたるも誉るいふく用ひられぬ類の添ひらハ
好学の歌なれども結句慮（ヲモンハカリ）を生へ気つけて議了侍るめり
てなまじひに言の葉をとゞむる人のこゝろ得を然めるは誠あるまじき

ることなる事を編者のまに述べる所なるべし　下略

歌文に筆の句も又同し

一 柳のうしろ藪の中など学るに柳の意会せハいとく及するとも類
なし柳のうしろ藪の趣と愛をさしゆかずして桜のうしろ
梅のかけなどいわれずしく学るに柳を末とも深く入たかくのこ
く句作りなるは、あるまじきことハ一二之友梅藪ハ及なくして外の木
草といへらんよりハ是柳に先会の意会せものこたへ柳に学るを
心ざしひかるかくのごとく神し出べきの意あり後の学者
ニ柳のあつかひしことをさくりて手がかりとすべし

一 俳諧のやうな古徳なるが、古句編目造の出より出る作こ備なるハい
つまでも通ひ得る様に御命侍るのまゝに定めたまへる也下

十二月より上方にて行る句をかくのごとく仕しえびす
講とも通ひやすく名人のなを求る初発をとり出す
只句面をて時時に様に仕立ものとて句意学文にて伝ると
ひふやうにいろ〳〵仕の叶もさる故こゝろ趣して上方の格をを
とるもあり場を入るとしてかるの場をとるも場をあを入
るうちとして文盛の人もきびしく仕はし所うく仕諧の格をを
るも三界の時仕方をもえへ仕伝授をうけ

一 新古今時行もいろいろ使あるなを会せてまて
いまさ句の神へうるをその尾と為へ句の一句の神定り
行を就変化の変化をくして考るもあり学は尾を等
もあくしてかの是をうきあこ

一 きの和の泥をきうの句を初より汐干を会よくて白鳥れた
まひし時の去新の場こ泥をきるなを汐干の句
神を汐を初を幾変を生へし泥をきるとを古めのしき河
あれこ此度をかうきを柳といふより泥をきるとつきたる
を新縁をうを此の泥をきうとも此後中されまくと
かく業句神をとくに生業に〳〵

一 きの句の場の業を此がまさを世の人をあをを句こといへとも
業物を此の他句をを等つを〳〵等中されて此場の業を
古等の業は業尾の汗を初月なにをる句の仕ひを新さ
面く〳〵ひをうを源川の尾の新を伝まて幾変を業流
しに元信ををあれ行る句こよせをのをを会せをのをを

此つく修行人深ミのめ不知いふる事あるまじく候初心の学者ハた
だ見る事まよひ一代風雅をとりとめかるゝ事なるまじく〳〵翁
死後ニても東西の門人其筆を執りひやうふ此人々の誓さし出
而との事もなく此へとも翁の俳諧を得られ侍るもうら悲し
やするこ

去始て後の此ことを翁つね〳〵咄しやされしことも世残れ此自
賛して咄しられしといふ心ゆかさし其事もあれ自句を天然
の俳諧とて咄せんとすといふも猿蓑ありかん是を出書かれ
あしきの但書ハ某子息ノつゝひし深川の庵の作と云ふ

一 其言ふよき翁出て一歩をきとめられ

法くりしく哀れなるめ作るいひしきまゝ書の字法をもふ将の

むかしこの翁より出し俳諧も文学を書きてよひしハその比の
宗匠ゆへ其人々其法とゝへて外の字集の如く俳諧を
ふるまふ之古を立て字にも付すのりし中略自然と句にも
これを心をあふるを立てしあるへし世に其店の都とのみなくと
ふるそれよりて其猿蓑の都なれ

一 猿蓑を法て此さんの句是も猿蓑ニ続きて文字も見えぬ
たるを袖らけ合せ物とも寄せ作り法て出るんよりその蝶の字の
の字法常ニ俳諧にかまへて蝶を此後までへし法て他ん
とをやしさればよし〳〵

一 猿子の其さを見て此るまじく此句を翁其年未だ拙者において
俳諧といふまじく是ホを称と其ゝ句に是ふるそれて此巻

かと句作出来やうへと深く思ひ定めざれば成るべき句作なり
先師の云ふ所を思ひ理をもとむる人多く俳諧本位を忘れ理を求る人多く俳諧の仲間なりと考へ侍べし
中さるれば
蕉翁初歩の頃も全く理を本位とする所あり
桂子の景色〻〻深きものを思ひ中さるれば一句に景を
拾ひ考へき所こ
拾ひ考へ所に
一 蔦の葉に表裏の色〻〻ありと定め〻〻定上の句こ
蔦の葉に表裏色〻〻ありと句に一度風雪霜露等を経たる時
蔦の葉の拾ひ考へらるる者も尋ねたるといふ情
きて作る所よ奇とて出さるる句と表裏せる句)

きて〻〻蔦の葉の色〻〻ありと定めば深く表裏せりうら
所をうちふまれて表の色〻〻きの面白きよと中句こ先師発句
の中にても等へる句こ
一 多仙子雪数度も降りたれば雪の枝に花と外の
雪よりて中さるれば〻〻花いつまも句の神ある所をよく
世上業以へ〻〻 和歌よ制の詞と定めるも神妙の不こ
一 津の国のなにはの表を芦の枝葉よ風流こと
見も難波芦考めと作られいうる所なるや和歌はよみ
会せとやうの中て津の国なにはと山城八幡迫江八幡と
会の外をよみ中さるる西行より初まるよ八幡こ
ちーのふ〻ふるもく〻なるこの句の神のひと振

ゆく〳〵ゆくいうかともうさて和歌六首をもうく元のあさら
しきを第一といさ〳〵風をよくなる〳〵の小川のタくれまさきそ
こ〳〵元初句の弱よてきのかれなつを流人よ宣てよ〳〵見又
時心ばちうひまそ〳〵元を納涼の弱之上十七字八全結然のをく
よ〳〵みて下の所敬をを元初句をそあるよとおもひ
こゝ宗之宣家て百人一首をゝ〳〵の小暑折八なゝの小川を
ゆゝりと見夜の字をとをとそへ八時の〳〵弱よて出て老式和歌
のをハ時人なされをくおんを拙句をゝ〳〵元寄句の
言人よ為句作せきされゝ桃花の名をゝとあ

一

言よ言つを合をくいをんん句をれをも時をを言んの
通ひ同〳〵をなる為同句まを弾〳〵されゝ拙句只をを時句を

第一といさ〳〵他人の芸儀をゝ〳〵元情の句結こ為ふ
も迷をもよゝ元只句句本句の時不よ通ひ元句の所結を言の
ををゝまを下よ言の時をゝ〳〵面白をを時句を通を元結
よ俳〳〵をるまて為り拙句句をて時をゝ為句と第し和歌を河
言新迷を新を本結多くゝ時をも元時句の為句之元を
流〳〵中へををて為ゝをるりの時をて句別句をを為元
為を中元〳〵本文も拙句を元老成よをり時をよをりの元合
せりのを言を通て為を言時をよ通ひ中より本拙句の〳〵句句
時をゝいを

此句仕立見れば宣言言や拙句を言の〳〵〳〵なをのやゝをならん
許六雖はつを〳〵ふあ〳〵とのをと中地蔵言こ時をもあをを時

[illegible]乳燕書来添ル書を時ニ亜白を[illegible]新しくもあり又[illegible]縁なき
ものをよせ集せて宜〳〵仕立てらるいのもまた[illegible]なるべし但拙者只
今を此句を第一といさ〳〵か句の内不句の内和[illegible]と実景をとる
[illegible]〳〵俳諧よも詞もまた[illegible]と云るい形と実景
とを[illegible]上句の調と詞の文なしまた用ひをしてハ美
濃風のやうに成て浅近に陥へし　始を此語を取かさ
[illegible]ハ[illegible]を[illegible]〳〵後よりの名月八句論なれた
添ヘきとて成さるを例[illegible]既に後[illegible]羽流の門付六[illegible]
を出されて時の達人才添ヘ〳〵まられやう高慢や言[illegible]の
今[illegible]より[illegible]田の[illegible]句を[illegible]
[illegible]を添ヘ〳〵あり

[illegible]地俳諧[illegible]〳〵あやまりありといへとも昨の集定き[illegible]
又[illegible]

二月

許六丈

芭蕉翁墨

一芭蕉の古池の句いろ〳〵[illegible]句を[illegible]
て有ヲ〳〵〳〵[illegible]角も山[illegible]の[illegible]
[illegible]老井[illegible]
[illegible]
[illegible]の句を[illegible]
[illegible]芭蕉の滑稽[illegible]

りとて芭蕉庵をおいて称賞ふかしきまでいうてみや元禄
蛙の声ともいえん蛙の花と巻句まもしていうなる所名句まや
名句くと唱へて味ひ言ものいふ〜所人のあまるすきみと
さなれ歌よりなりあるへく同じつのりて音仏人うれし句蛙と古池
のうけ言と能く味ふ工夫あるへくく
例の自賛とかく蕉門の古老皆此言ふ〜は其心ハ是り
かく〜言ふ為の為に有んされと斯と極て云ち句を作る
言葉の書かさんるを為て吟ふ言さしり許ふを
又いく合して句〜ふ慢せ〜やうも実まあるハされハ許
さへ云ふ此投言も又同じ〜を双方の悪口とさて〜固試ふ
案ず為を記ふ必しも浮ふりとまを有ふ世人言評あハ

まふ浮ふへきあり句して句を表ふ弱まて徒なると為まて
物あると或ハ寓意ふ〜して風情を徒くふあり又ふ寓意て
味を含るあり言餘尚拙くなれ来ねてハ極の拙く
此句を寓意と作せるを凡古来の俳句多分言撰又ふ
理詰物ふ〜ふ〜して一統あり〜を家断て活弱ふ也肩
を比ふへき姿情を為の色ふれ〜を此ふの句を最ふ有ハ
云かけもなく物ふ〜も拙ふ〜ふ表ふ有ふ〜ふ〜又
俳言を強く用んふ〜ふ〜せる自然ふ〜〜〜て素ふ言を合
めり深川宗岳の例ふ西池あり付ふの業ふ〜ふんて池
時ふ俳個せる蛙の岸ふ〜ふ花ふ〜ふ言ふ〜ふ〜ふ〜
ふて実ふ杉桃樹ふ深井ふ〜ふ〜ふ柳の糸の日ふまて出く

生ける竹の中より蘇敬業の皆こゝに伸出ることなども言き
はなれ出るまゝ竹尾八百さかゝりて竹蓮の花ゝ者ども
ありと耳に聞て入ゝさる程言語同断あれ共海ゝ
かゝる淑物もはとゝぎすよりあとゝ天地造化のゆゑ
風よ私ゝ神ぶ妙ぶと相感ゝ猶黙ゝてにきまゝ
なるんゝ余古道中句の評ゝ全是者ゝ妙境誠用
筆古院こゝ八王維輞川五絶を以ゝ絶稱多き中ゝも
慶安竹里館又ゝ木蓮芙蓉山中光紅萼洞戸寂無人紛
〻ゝ閑且家又人間桂華落夜靜春山空月出驚山鳥時
鳴春澗中古ゝ人の作を引合せて無味中ゝて味を知へ
とゝ云ゝて云ゝ者の字を眉目とゝゝ一書ゝ山吹と
蛙ゝて面白ゝあゝゝゝゝゝゝゝゝ古池
ゝゝめらまゝゝを思ふ返りて句を持へゝ多り後世漢ゝ八晋ゝ
を宗と世ゝ故ゝ人ゝて一句の上下ゝ同意の句と見ゝ多ゝ
へり亦一段ありされゝゝさゝゝゝゝ例の偏固ゝ

一行舟や皆ゝ月ゝ独の紋小枝風の吹ゝゝゝゝ渡ゝ嵐雪
昼日別者度へ行ゝ時分鮫ゝ月の吹ゝを見ゝゝ句を名句
のゝ蓼ゝ見ゝ出ゝゝ蹈ゝ蹈ゝ句ゝ多句ゝゝゝ出来ゝ
ゝ表世ゝ見ゝ程の景色を述ゝまゝゝ小枝ゝ句も嵐雪ゝ句も共ゝ
なゝゝゝゝ雪ゝ見ゝ行舟を知ゝゝゝゝ又宗谷人の袖の紋を
みゝゝゝ分ゝゝゝ嵐雪ゝ句を又別者ゝのゝゝゝと紋ゝ知ゝ
ゝとゝ者出なゝゝて八後ゝ後ゝゝゝゝ者ゝ人のゝゝゝ

ゆゑあるべきなれども何のゆやらきこえぬるすこし定めて面白くも
よ侍べきをおもふりまそいさしーいまとなる只あらられてハ此老も
めいとくなるべしーとくと他の句もなかりて参るそーまも
あるべきるべうるる句を参らうて再ゝ参り句を合点
ゆるぬるを者

一今もやるひとくねぶを長つまをとゆるよりの後よ注もかく
を附合を此句の味ひまなきより外のーこゝ所ーのよし
筆者なるいと句ハこれもの字おくうてて
毒蛇こと後よ物ゝれしー句こゝをきたしてうつは
つ人ゝまをめらるを一首意味をひくるゆ多うるべしーるを
能こゝ文をめくらしー一ゝをいうやうも他を換をぬ板よるる
へくゝ句つのるゝ人ハ毒のとくゝまをて

一去くるまゝ夕日ゆるる原くるゝ小枝此句も文面よ字ゆゝそこと
めか感ハるるれて中夕日のゆるる原くるゝ毒ゝ再ゝハ字ゝ
ゆゝいやう此不うんハまゝやうゆゝ此句ゝ毒ゝ文面の句を
ゝ一句ーてあくるゝ作ーその毒の名人るゝと作られはよー
毒ゝの句此よりゝおるゝ作ゝ

九月廿九

理拙丈

許六

一蕉の古歌の句を丈あるーて字ゆるるの天下をなるゝ
きゝ一句をゝ天下よ名るゝをゝ名ゝ毒ゝの

もし素堂の句の名句は撰ぶべき集に洩れ
まで所々あまたく篇に名句とふべきあるべし又
俳諧名句とまてう天下に鳴らす事ふ富士の高
のごとくも此句名句とて名らたてその許まもあらて
かくまでよみ通ひ拙なかくのごとくまへハ弦国の人
相交るとうさを天下にものかくて俳諧名句とい
ちんや此句の意味篇よりよく篇てるの此句をもえへ
物語をやいへいう篇の流也やともいふ風なくんぞ空
きうふり篇をおとし人を句意とあるをさまば我身のよ
ちんとのちりを取て生角風を素堂松風を外此句と
笑ふ得さるものハ篇と句解を学問せんれ

江戸の門人なと一人も合点いたさるものハなくハ小枝ん
年登りし此会ハ俳諧ハ学問もて篇と学
されはよしまたまいまこそ俳諧ハ篇の句とんされて
学ひたる人と考りの句とんされて行とき見ること極められ
嘉堂素堂なくして一名を極別門人流へ見ものをもあと
俳諧ハ篇の名およ風の名こしらへを俳諧ハ
しして飛深うるべし

一小枝月の句嵐雪本松尚志まてるまてり素風よあらて
乙州まて素水方まて尚志えせ
一名角如竹名句くてもて発句まあるを家と作ふいふ
ふうちひらや宗茂り木枝の一日吟て作りまり嵐雪り黄

菊白さ〳〵その外の〳〵小枝う家なるこゝろも身まかうしそう
柳ういつの弓こ首戸の木の伊もを咲やらんこゝもとの白こ玉石尾
こおいて白玉性殺生禁断寿子房会はけうこう大根の白いはう
こゝろもこゝろれおこゝまこゝ家のうちんなふ一度いつまも感心
屋作も惣心せ〳〵こ一人のうちやこゝも以上もの酒八白うめと
安宅こゝて下もの多合ふ和をこるうやされこゝや今忘れふ
中にあり〳〵とおこつまこゝくもの化もはと歌の風とうけ会せ
て家の家〳〵まこゝれ〳〵まゝ所後いこゝ生他つの笑きの
とくこゝ

小枝句語六ハこゝもあれこゝ度の浩徒あるこゝ強て編こゝ
又嵐雪う句ハこゝ度俳西郷 寛政年集 あるこゝも名句なこゝ

新せ〳〵こゝ句俳世坡う扇忘あらん
涼光う風嵐雪う業ハいこゝも秀逸こゝ小松柳う句
こゝ生て徒こゝも思こゝ取こゝ聞の徴せあるこゝや高集待
歌こゝ業句こゝあるこゝて秀逸こゝ称〳〵年〳〵も雪こゝの
表こゝ実こゝこゝ思こゝも又思こゝもあるハ人こゝ笑あるこゝ
なれハこゝ思こゝ句こゝ新あらん

一まりの徒こゝれもかこゝなこゝ重こゝものこゝも芸こゝ歌こゝ
の句こゝあるこゝ芸ハこゝ作こゝ出こゝて芸こゝ歌の文道こゝ
歌不易こゝこゝれこゝこゝのひ〳〵こゝを流こゝこゝ
こゝるのこゝかこゝる和立こゝ歌こゝ歌の歌こゝ業こゝまこゝりこゝる
こゝ伝作〳〵こゝて一人こゝまこゝかこゝ行の流こゝこゝ文こゝ流川

の出来しけるまあらん幼任尾より附属ありて何角云
いまさしくかくとしへまふべき
許とりの字前へかくて無念と物もとゝ出たつき
之の字を後へと更ゝ
まかゝるとハ南ゝ氏味よてあゝゝ
無とすと置ゝる意なりとて其代より出て蕉翁と逢
されハ何をもとし何をとゝ推とゝかゝ但許と書のかく
此句なを氏句をもおとゝるより部ゝとの句実
なゝハ過こいうも許と続のかゝ古れ書ゝ句多ゝ
之

一小枝ゝあらゝゝゝ夕日ゝ原ゝ成句ゝゝなゝれかゝ

ゝ西行の甲斐ゝ根の櫻の原と詠られてゆかゝ跡まゝ
ゝ歌の里此歌をよりて絶りゝ名所ゝ有ゝ
月のゝをなゝれゝはまてハゝゝ成句化一生なゝへゝ
ゝあゝ加賀ゝ小枝といゝ化去ゝとゝ翁も感ゝ有
之ゝも句ゝありゝ蓋ゝゝ舟源ゝ作ゝれゝ
ゝゝ西ゝ尾ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
雪の向ひ高小枝ゝゝかく自在ゝゝゝゝ
ゝて師ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝの多人ゝゝゝ家ゝゝゝゝ
時国ゝ有ゝゝ夕日ゝ絶ゝ原ゝ晴ゝゝゝゝゝゝゝ
とゝいゝて但時ゝ日月を結ひゝゝ成ゝゝ趣ゝゝ

さのみ可なりとも思はれぬ句なれども

名月の日も雨方とも泥せられぬかなし二子とも同門

の意味なりけやらまた悪口多く結論の秋を失しいと

あはれなり

舟遠し　いとにも住まふ人〳〵　農の句も老熟ありと

云へし　帆柱を句とせん蕉翁の称賞ありしとぞ云へられ

ぬ意味なりかなし

十月五日

許六史

理坡

菓子屋やふり売れ行く秋の雨　理坡

世松の中をもしる夕雑子　路通

小酒屋に煙草を休む酒もふし

寝ぐるる晩を